

補文節における非能格動詞外項の性質 : 数量副詞 「たくさん」の解釈可能性を通して

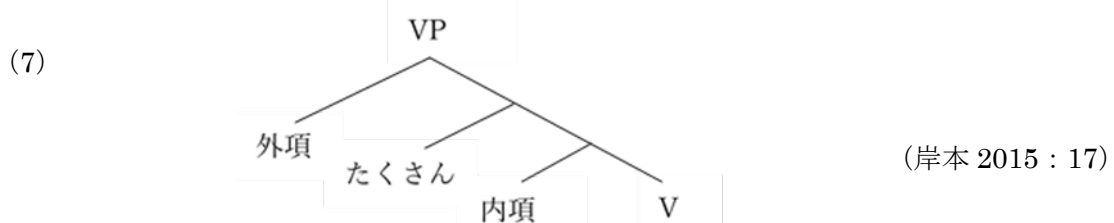
著者	竹本 理美
雑誌名	筑波応用言語学研究
巻	27
ページ	15-26
発行年	2020-12-23
URL	http://hdl.handle.net/2241/00162347

2.2 補文構造における「たくさん」の解釈

補文構造を持つ構文では「たくさん」が補文内の外項名詞句を修飾する現象が見られる。先行研究が指摘するように、本来「たくさん」からは修飾されないはずの非能格動詞の外項が、テイル文では修飾されるようになる。

- (6) 子供が公園でたくさん遊んでいた。 (再掲)

この現象について、岸本 (2015) は「たくさん」の解釈可能性が構造的に決定することを主張している。すなわち、以下に示すように、単文の場合には「たくさん」が VP 内の外項と内項の間に生起し、自身よりも下位の要素 (内項もしくは V) を修飾すると論じている。



また、テイル文に関しても単文での分析に基づいた説明を行っている。岸本 (2015) は、(8) に示すように、テイル文において「イル」が非能格動詞の VP を補文として埋め込み、「たくさん」が「イル」の VP 内に生起するとしている。このとき、補文内の非能格動詞の外項 (「子供」) は「たくさん」より構造的に下位に位置するため、修飾を受けるようになると分析している。

- (8) [VP たくさん [vP 子供 遊ん] (で) いる]⁴
(岸本 2015 : 18 ブラケット表記に改めた)

- (i) a. コマが机の上でたくさん回った。 (「たくさん」=回った量)
b. 先生が生徒を教室でたくさんほめた。 (「たくさん」=ほめた量)

(ia) は非対格動詞、(ib) は他動詞であることから、本来であれば「たくさん」は動作量解釈を示さないはずだが、上の例ではそのような解釈が可能である。これは、(i) で挙げた動詞がそれぞれ「非対格ミスマッチ」(unaccusative mismatch)、非影響動詞 (Miyagawa 1989) と呼ばれる、内項の変化を含意しない動詞であることが要因だと考えられる。なお、「たくさん」と同様の現象を示す遊離数量詞 (Miyagawa 1989) の現象では、このような違いは見られない。

- (ii) a. コマが机の上で 2 つ回った。 (「2 つ」=コマの数)
b. 先生が生徒を教室で 3 人ほめた。 (「3 人」=生徒の数)

以降ではこれらの動詞を取り上げることはしないが、内項における変化の含意の有無との関連や遊離数量詞と「たくさん」の違いについては今後考察を重ねる必要がある。

⁴ 岸本 (2015) は補文の非能格動詞についても VP と表しているが、本稿では外項が現れる場合には統一して vP と表記する。

このように、岸本（2015）では「たくさん」が自身より下位の要素を修飾すると分析することで、単文および補文構造を持つ構文での「たくさん」の解釈可能性に対して説明を与えている。

先行研究では、主にテイル文が取り上げられているが、1節でも示したように、使役文においても同様の現象が見られる。このとき、使役文では、テイル文と同様に非能格動詞を補文として埋め込んでいるため、岸本（2015）の分析が適用できると考えられる。

- (9) その社長は外国人労働者を工場でたくさん働かせた。 (再掲)

以上から、たしかに「たくさん」の解釈可能性は構造的な位置関係から説明することが可能であるように思われる。しかし、この分析では、テイル文や使役文という性格の異なった構文間において、補文内に現れる非能格動詞の外項が単文における内項と同様のふるまいを見せるという現象の本質を明らかにしているとは言い難い。「たくさん」の解釈可能性が示しているのは、本来非能格動詞の外項である要素が、補文構造を持つ構文の中では内項として捉えられるという点である。なぜ、元々は外項である要素が内項として捉えられるようになるのか、より原理的な説明を検討する必要がある。次節では、テイル文、使役文それぞれで「たくさん」の解釈可能性と類似した現象を提示し、補文節内の外項の性質を考察する。

3. 補文主語としての外項のステータス

本節では、「たくさん」の解釈可能性に関して、そのメカニズムの検討を行う。具体的には、テイル文、使役文において主要部移動による再構造化が行われることで、補文主語の外項が内項としての性質を持つようになることを主張する。

3.1 テイル文に対する分析

非能格動詞のテイル文において、「たくさん」の解釈可能性と同様に、単文とは異なるふるまいを見せる現象がある。それは、次のような場所ニ格句が生起する現象である（工藤 1982, Nakajima 2000, 福嶋 2002 等）。

- (10) a. このビルの二階には高齢者が働いている。
b. 公園にはたくさんの子供たちが遊んでいる。

(Nakajima 2000 : 99 アルファベット表記を日本語表記に改めた)

ここで着目すべきは、本来非能格動詞は場所デ格句をとり、ニ格句をとらないという点である。

- (11) a. このビルの二階 {*/に/で} 高齢者が働いた。
 b. 公園 {*/に/で} たくさんの子供たちが遊んだ。

Nakajima (2000) では、このような場所ニ格句が生起する現象は非対格動詞の場合に生じやすいことを指摘しており、(10) のような例では非能格動詞が何らかの形で非対格化すると捉えている。さらに、Hatakeyama, Honda and Tanaka (2004) では補文の非能格動詞が非対格動詞イルへの主要部移動 (head-to-head movement) を起こすことで非対格化するという分析を示している。この分析に基づくと、テイル文は次のような構造として表される。

- (12) [VP [V [VP NP [V [VP t_i] v]] V_i-イル]]
 □↑ □↑

つまり、主要部移動を経ることで非能格動詞が主節動詞と再構造化されて非対格化し、その結果、非能格動詞単文では見られなかった場所ニ格句の生起が可能になるとしている。

ここから、テイル文における「たくさん」の解釈可能性に対しても、上記の分析に基づいて説明することができる。すなわち、主要部移動によって非能格動詞が非対格化することで、元々はその外項であった要素が非対格動詞の主語へとシフトする。このとき、非対格動詞の主語は内項であるため、補文主語の外項は内項としても捉えられるようになると考えられる。そのために、「たくさん」からの修飾が可能になると言える⁵。

3.2 使役文に対する分析

使役文に関しても、テイル文で示した主要部移動の分析が適用できると考える。つまり、補文動詞の非能格動詞が使役化形態素 *sase* への主要部移動を起こすことで、補文主語位置の外項が主節動詞 *sase* の内項としてのステータスを得ると分析する (cf. Takano 2004)⁶。

- (13) [VP NP [V [VP NP [V [VP t_i] v]] V_i-sase]]
 □↑ □↑

⁵ 非能格動詞のテイル文において「たくさん」が補文内の外項を修飾する現象に対して、異なる観点から分析を行った先行研究に Matsuoka (2019), 松岡 (2019) がある。これらの研究では、バスク語の分析に基づき、非能格動詞が生起するテイル文を存在文として分析している。具体的には、存在動詞イルが主節動詞となり、主語を内項として、主要部が音形を持たない後置詞句を場所項として選択する構造を提案している。

(i) [VP 子ども_iが [PP [NP [VP PRO_i 公園で 遊ん] で] のP] いる] (松岡 2019 : 33)

このとき、非能格動詞の外項（「子ども」）はイルの内項として選択されるため、「たくさん」からの修飾が行われると分析している。以上の分析は、イルに着目したものであるために、本稿で取り上げるような使役文等の他の構文においても「たくさん」による補文内の外項修飾が行われることを予測できない。

⁶ Takano (2004) では、Saito and Hoshi (1998) に基づき、ヲ使役文に対して同様の分析を行っている。

つまり、非能格動詞が *sase* への主要部移動を経ることで使役動詞へと再構造化され、その結果、補文主語の外項は使役動詞の目的語へとシフトする。このとき、使役動詞の目的語は内項を指すため、補文主語の外項は内項としても捉えられるようになると考えられる。

上記の分析に関して、補文主語の外項が *sase* の内項としてのステータスを得ることは二重対格制約 (Harada 1973) の現象からも裏付けられる。以下に示すように、他動詞使役文では被使役者はヲ格として生起することはできず、ニ格のみ容認される。

(14) 先生は太郎 {*を／に} 本を読ませた。

上の例での非文法性は、単なる表面的な格の問題とは言い難い。それは、次のように、(14) の文を分裂文にしても非文法性は変わらないためである。

(15) 先生が太郎 {*を／に} 読ませたのは、(この) 本 (を) だ。

(15) のように、他動詞使役文における二重対格制約は、ヲ格が一つしか生起しない場合であっても非文法的である。ここから、二重対格制約は表面的な格の問題ではなく、意味役割が関与すると指摘されている (Williams 1981, Takano 2004, 平岩 2006)⁷。つまり、(14)

(15) で二重対格制約が生じるのは、補文内の内項である「本」と補文内の外項である「太郎」の両方が **Theme** (対象) として捉えられ、同一文内に同じ意味役割 (**Theme**) を持つ項が存在するためである。すなわち、補文内の外項「太郎」は本来 **Theme** が付与されていると考えられる。このとき、補文内の外項に対して **Theme** を付与できるのは主節動詞 *sase* のみであることから、補文主語の外項は主節動詞 *sase* に対する内項としても捉えられると言える。なお、Takano (2004) が指摘するように、(16) に挙げるような項が一つしかない非能格動詞やもう一つの項として与格項を要求する動詞が補文動詞の場合には、問題なく補文主語位置の外項がヲ格を伴って現れる。

- (16) a. その社長は外国人労働者を工場でたくさん働かせた。 (再掲)
b. ジョンがメアリーをビルに会わせた。

(Takano 2004: 306 英文表記を日本語表記に改めた)

これは補文内に **Theme** が存在しないためだと言えることから、非能格動詞の使役文において、補文主語位置の外項が *sase* の内項としてのステータスを持つと考えられる。

⁷ なお、二重対格制約には二種類あることが指摘されており (Poser 1981 等)、トコロ構文や経路ヲ格における非文法性は表面的な格の問題が大きく影響していると考えられる。また、平岩 (2006) では、Harada (1973) の観察や分析は現在の θ 理論の観点から捉えられると述べている。

3.3 まとめ

以上、テイル文、使役文では共通して主要部移動が生じており、その結果、補文主語位置に現れる非能格動詞の外項が文全体の内項としてのステータスを得ることを論じた。すなわち、補文構造を持つ構文における「たくさん」による補文内の外項修飾のメカニズムは主要部移動に基づいて説明される⁸。また、この分析によって、テイル文での場所ニ格句生起、使役文での二重対格制約、そして「たくさん」の解釈可能性を統一して分析することが可能となる。

4. 構造の違いと「たくさん」の解釈

前節まででは、「たくさん」の解釈可能性に関して、テイル文と使役文においては、主要部移動によって補文内の外項が文全体の内項としてのステータスを得ることを示した。

しかし、補文構造の構文であれば必ずこのような統語操作が行われるわけではない。たとえば、「たくさん」の解釈可能性について、ここまでに挙げたテイル文や使役文と同様に非能格動詞が補文として埋め込まれているにもかかわらず、「たくさん」が補文内の外項を修飾しない現象が見られる。

- (17) a. 子供が公園でたくさん遊んでおいた。 (岸本 2019 : 20)
b. その社長は外国人労働者に工場でたくさん働かせた。
(「たくさん」 ≠ 子供 / 外国人労働者の数)

(17a) のテオク文は、テイル文と同様にテ形述語であるが、「たくさん」は補文内の外項を修飾せず、動作量の解釈しか生じていない。(17b) についても、同じ使役文でありながら、被使役者の格がニ格になると補文内の外項を修飾しないようになる。ここから、非能格動詞を埋め込んだ補文構造であれば、どのような場合でも「たくさん」が外項を修飾するわけではないことが分かる。以下では、なぜ構文間で「たくさん」の解釈可能性の違いが見られるかについて、岸本 (2019) の上昇構造とコントロール構造に関する観察に基づき、このような解釈の違いが構造の違いと関連することを示す。

⁸ 注2でも言及したように、補文構造の構文において、「たくさん」が外項を修飾する解釈と動詞を修飾する解釈の両方が生じると判断する話者も存在する。

- (i) その社長は外国人労働者を工場でたくさん働かせた。
(「たくさん」 = 外国人労働者の数 (外項修飾) / 働いた量 (動詞修飾))

なぜこのような曖昧性が生じるかについても、本稿で提示した主要部移動分析で説明できる可能性がある。具体的には、補文構造の構文における「たくさん」の解釈可能性は主要部移動の有無に起因し、主要部移動が生じる場合には外項修飾の解釈が示され、何らかの要因で生じない場合には動詞修飾の解釈が示されると考えられる。このように捉えることで、(i) で見られる曖昧性は本稿の分析を支持する現象になると言える。ただし、本稿では「たくさん」が外項修飾を行うメカニズムに主眼を置いているため、動詞修飾に対する詳細な分析は今後の課題としたい。

4.1 テ形述語

先述したように、岸本 (2019) ではテイル文と同じテ形述語であるテオク文において「たくさん」は外項を修飾するのではなく動詞を修飾し、動作量が「たくさん」であることを表すと指摘している。

- (18) a. 子供が公園でたくさん遊んでいた。
b. 子供が公園でたくさん遊んでおいた。 (再掲)

この違いについて、岸本 (2019) は「たくさん」による外項修飾が可能なテイル文と、外項修飾が行われないテオク文では構造が異なることを指摘している。たとえば、(19) (20) に示すように、両者は主語の選択制限およびイディオム解釈に関して違いが見られる。

- (19) 雨が {降っていた / *降っておいた}。
(20) この店では閑古鳥が {鳴いている / #鳴いておいた}。
(岸本 2019 : 22-23 一部改変)

この違いは主節主語が何に由来するかと関連しており、テイル文は主節主語が補文主語から繰り上げられた上昇構造を持つ一方で、テオク文は主節主語が主節動詞の主語に由来し、補文には PRO が生起するコントロール構造を持つと分析している。

- (21) a. [VP [VP 子供 遊ん] (で) いる]
b. [VP 子供_i [VP PRO_i 遊ん] (で) おく]
(岸本 2019 : 21 一部改変)

したがって、非能格動詞の外項（「子供」）が補文主語として生成される上昇構造では「たくさん」による修飾が可能な一方で、補文主語位置に PRO が生成されるコントロール構造では修飾ができないと言える⁹。

ここまでは、岸本 (2019) の観察から、テイル文、テオク文における「たくさん」の解釈可能性が構造の違いと関連することを示した。以下では、使役文についても構造の違いが関与することを示す。

4.2 使役文

使役文では、被使役者の格によって意味に違いが生じており、ヲ使役文は「強制使役」、

⁹ 岸本 (2019) は、テイル文とテオク文の「たくさん」の解釈可能性について、上昇構造とコントロール構造の違いに基づき、(7) (8) に示したような構造的関係の観点から説明を行っている。

ニ使役文は「許容使役」として解釈される (Kuroda 1965, Kuno 1973 等) が、さらに格の違いに対応して構造も異なることが指摘されている (Terada 1990, Harley 1995, Miyagawa 1999)。たとえば、動作主指向副詞と共起した場合に、次のような違いが生じている。

- (22) a. 花子と太郎が一人で子供を公園へ行かせた。(ヲ使役文)
 b. *花子と太郎が一人で子供に公園へ行かせた。(ニ使役文)

(Miyagawa 1999 : 250)

動作主指向副詞「一人で」は、同節内に動作主句が生起することで修飾が可能となる。つまり、(22) はヲ使役文では動作主指向副詞と被使役者が同節内に生起する一方で、ニ使役文では両者が異なる節に生起することを意味する。ここから、Harley (1995) では、ヲ使役文は被使役者が補文主語として生起する構造を持ち、ニ使役文は補文主語位置に PRO が生起し、被使役者がコントロールする構造を持つと分析している。以上の分析は、次のような構造として示される。

- (23) a. [_{VP} その社長が [_{VP} 外国人労働者を [_{VP} 働 k-]] -ase た]¹⁰
 b. [_{VP} その社長が 外国人労働者に_i [_{VP} PRO_i [_{VP} 働 k-]] -ase た]

したがって、使役文においても構造の違いと「たくさん」の解釈可能性との相関が見られる。つまり、ヲ使役文のように非能格動詞の外項が補文主語位置に生起する構造では「たくさん」による修飾が可能であるが、ニ使役文のように補文主語位置に PRO が生起する構造では修飾ができないと言える。

4.3 さらなる現象

ここまでは、補文構造を持つ構文間における「たくさん」の解釈可能性が、構造の違いと関連することを提示した。さらに、複合動詞やテホシイ文においても同様の対立が存在する。

- (24) a. 子供が公園でたくさん遊び始めた。 (「たくさん」 = 子供の数)
 b. *子供が公園でたくさん遊び飽きた。 (「たくさん」 ≠ 子供の数)¹¹

(岸本 2019 : 23)

¹⁰ Harley (1995) では外項を導入する機能範疇として EventP を用いているが、注 4 でも示したように、本稿では vP と表す。

¹¹ (24b) の文は、岸本 (2019) によって非文と判断されている。これは、「たくさん」が外項 (「子供」と動詞 (「遊び飽きた」) の両方を適切に修飾できないためとしている。

- (25) a. (その社長は) 外国人労働者が工場でたくさん働いてほしい(と思っている)。
 (「たくさん」=外国人労働者の数)
 b. (その社長は) 外国人労働者に工場でたくさん働いてほしい(と思っている)。
 (「たくさん」≠外国人労働者の数)

(24) で示したように、複合動詞では後項述語の違いによって「たくさん」の解釈が異なっている。また、(25) のように、テホシイ文では補文内の外項の格の違いによって解釈が異なる。この両者に関しても、構造の違いが「たくさん」の解釈可能性に影響を与えている。たとえば、複合動詞では、テ形述語の場合と同様に、主語の選択制限やイディオム解釈から、「～始める」は上昇構造、「～飽きる」はコントロール構造を持つ(岸本 2019)。

- (26) a. 雨が {降り始めた。／*降り飽きた}。
 b. この店では閑古鳥が {鳴き始めた／#鳴き飽きた}。
 (岸本 2019 : 23-24 一部改変)

また、テホシイ文は、使役文の場合と同様に格の違いによって構造が異なることが指摘されている(Kishimoto 2000)。以下に示すように、ガ格名詞は補文主語位置に生起する一方で、ニ格名詞は補文主語位置に生起する PRO をコントロールしている。

- (27) a. その社長は[外国人労働者が働いて]ほしいと思った。
 b. その社長は外国人労働者_iに[PRO_i 働いて]ほしいと思った。

以上から、複合動詞、テホシイ文についても構造の違いが「たくさん」の解釈可能性に関与すると言える。

4.4 まとめ

ここまでに挙げた各現象における「たくさん」の解釈可能性と構造の関係を整理すると、以下のように表すことができる。

- (28) 補文主語位置に音形を持つ外項が生起する構造
 a. 「たくさん」による補文内の外項修飾が可能
 b. 例：テイル文／「～始める」／使役文(ヲ格)／テホシイ文(ガ格)
- (29) 補文主語位置に PRO が生起する構造
 a. 「たくさん」による補文内の外項修飾が不可能
 b. 例：テオク文／「～飽きる」／使役文(ニ格)／テホシイ文(ニ格)

本節では、岸本(2019)の観察に基づき、補文構造を持つ構文間における「たくさん」の解釈可能性が、各構文の構造の違いと相関することを示した。

それでは、本節の議論は3節までの分析と照らし合わせると、どのように解釈できるだろうか。(28)(29)は、従来それぞれ上昇構造(主語上昇(テイル文)、目的語上昇(使役文))、コントロール構造として分析されてきたものに対応している。しかし、前節ではテイル文や使役文における「たくさん」の解釈可能性は主要部移動によって説明されることを論じた。つまり、上昇構造では補文動詞が主節動詞への主要部移動を起こし、その結果、補文内の非能格動詞の外項が内項として捉えられ、「たくさん」による補文内の外項修飾が可能になる。この主要部移動に基づく分析が妥当であるとするなら、(28)で挙げた構文では主要部移動が関与している一方で、(29)のコントロールを含む構文では主要部移動が関与していないと分析することが可能である。

5. おわりに

本稿では、数量副詞「たくさん」の解釈可能性を通して、テイル文や使役文等の補文構造を持つ構文における補文節内の外項の性質を明らかにした。具体的には、主要部移動によって補文内の外項が、文全体の内項としてのステータスを得ることを主張した。また、その主要部移動の有無は、補文主語位置に補文動詞の外項が生起する構造か否かという構造の違いと関連することを示した。

今後の課題については、数詞や他の数量副詞との比較を通して、数量副詞「たくさん」の特徴をさらに明らかにしていくことが課題である。「たくさん」の特徴を詳細に示すことで、本稿での議論がより確実なものになると考えられる。また、本稿で提示した補文主語としての外項の性質が他の構文においても見られるかについても、今後検証を進めていきたい。

【参考文献】

- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房。
岸本秀樹(2005)『統語構造と文法関係』くろしお出版。
岸本秀樹(2015)『文法現象から捉える日本語』開拓社。
岸本秀樹(2019)「非対格仮説と数量副詞」『日語偏誤与日語教学研究』4, pp.3-27, 日語偏誤与日語教学学会。
工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」『人文学会雑誌』13-4, pp.51-88, 武蔵大学。
平岩健(2006)「二重対格制約と格」三原健一・平岩健(著)『新日本語の統語構造—ミニマリストプログラムとその応用—』pp.281-306, 松柏社。
福嶋健伸(2002)『中世末期日本語のテンス・アスペクト』博士(言語学)学位請求論文, 筑波大学。

- 松岡幹就(2019)「「ている」進行文の統語構造と数量副詞の解釈について」竹沢幸一,本間 伸輔, 田川 拓海,石田 尊,松岡 幹就,島田 雅晴(編)『日本語統語論研究の広がり—記述と理論の往還—』 pp.25-44, くろしお出版.
- Harada, S.-I. (1973) Counter equi NP deletion. *Annual Bulletin* 7. pp.113-147. Research Institute of Logopedics and Phoniatics, University of Tokyo.
- Harley, Heidi (1995) *Subjects, events and licensing*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Hatakeyama, Yuji, Kensuke Honda and Kosuke Tanaka(2004)The Locative Construction in English and Japanese. *Linguistic Analysis* 34. pp.55-65. New York: Elsevier North-Holland, Inc.
- Kishimoto, Hideki (2000) Locative verbs, agreement, and object shift in Japanese. *The Linguistics Review* 17, pp.53-109.
- Kuroda, Shigeyuki (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Doctoral dissertation, MIT.
- Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese language*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Matsuoka, Mikinari (2019) On the locative structure of *-te iru* progressives in Japanese. 『言語研究』 155, pp.131-157.
- Miyagawa, Shigeru (1999) Causatives. In Natsuko Tsujimura (eds.) *The Handbook of Japanese Linguistics*. pp.236-268. Malden, Mass: Blackwell.
- Nakajima, Heizo (2000) On niwa...teiru constructions. In Kenichi Takami, Akio Kamio and John Whitman (eds.) *Syntactic and Functional Explorations in Honor of Susumu Kuno*. pp.99-113. Tokyo: Kurosio.
- Poser, William J (1981) The “double-o constraint”: Evidence for a direct object relation in Japanese. Ms., MIT.
- Saito, Mamoru and Hiroto Hoshi (1998) Control in Complex Predicates. *Report of the Special Research Project for the Typological Investigation of Languages and Cultures of the East and West*, University of Tsukuba, pp.15-46.
- Takano, Yuji (2004) On the syntactic structure of Japanese accusative causatives. *Tsukuba English Studies* 22. pp.295-310.
- Terada, Michiko (1990) *Incorporation and Argument Structure in Japanese*, Ph.D. dissertation. University of Massachusetts, Amherst, Amherst:GLSA.
- Williams, Edwin (1981) Argument structure and morphology. *The Linguistic Review* 1. pp.81-114.